

シマーグワァーがこんなに美味だったとは思わなかった。目の前の本物に気が付かなかったのか、あるいは四十も過ぎないとわからない味だったのか、それはどうでもよい。三十年もの古酒泡盛など、めったに口にするとチャンスがなかったのである。

街の赤ちよ  
うちんで寝れ  
まわって  
る、今風パッ

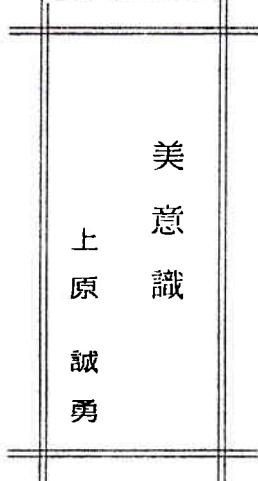
ケージの、あの軽クチ泡盛は、アワモリ君の愛むところではないことは確かだ。若い泡盛独特のクサ味とシナガラサが、三十年も熟成すれば、実にまろやか、複雑で幻想的な味に変わるもの

かと...古琉球人の美意識に触れる思いである。深く気品があり、底知れぬパワーのある味を、酒として愛した琉球人の美意識が、今、やっとわかるような気がする。

い。身体が納得する味を知ったとき、文化の違いや、個性をはっきり知らされる。沖繩の近代美術の扉を開いた大正、昭和初期の画家たちは、その辺りの事を表現のベースと

史の中でおぼつ化してきた。「日本人になろう」としてなれなかったウチナーンチュ」と、西銘サンは名言を發したが、ヤンバルクイナもイリオモテヤマネコも大事、この沖繩本来の美

# 唐獅子



意識こそ、ウチナーンチュの自信と誇りの根として回復すべきである。尚家文化、遺産問題も、その後ウンともスンともな

シマザキはシマーグワァーから琉球泡盛へ、市民権を回復した。ウチナー料理にはやはり泡盛がよい。フランス料理と泡盛、日本料理と泡盛、どう組み合わせても口の中がしっくりいかな

して、十分に据えていたのではない。もっと積極的対応が行政に思う。沖繩のオリジナルな美意識は、時代の中でウチナーグチ(沖繩語)同様軽んじられ、日本化の中で市民権など勝ち取ることなく、不明確のまま、歴しいものだ。(画師沖繩代表)